

3 3 3 文字以内

作者さんや読み手さんの声は

<http://www.columnland.net/>

にてどうぞ

ある日の放課後。

「あ、やべっ。俺、明日までの宿題まだやってないやつ」俺の隣で達也が叫んだ。まったくこいつはいつもいつもやるべき事を後回しにして、最後は俺のところに助けを求めてやってくる。今回もいつものパターンだな、と俺は思いながら、とりあえず聞こえなかったフリをする。「頼む、助けてくれ。このとおり」しょうがない、今回も助けてやるか。といっても、今回はいつものように俺のを写して終わりとはいかない。なぜって？だって今回の宿題は来月の文化祭のスローガンを決めることだから。そんなもん写したら二人とも職員室に呼び出した。ま、俺なら上手く言い訳して逃げられるけど、達也はそういうの下手だからな。つかまったらまず間違はなく罰を受けるはめになるだろう。「で、なんとなくはできてるんだろ？」と、俺は達也に聞いた。達也は首を振った、小さく横に。こいつ、やる気ねえな、と俺は思ったが口には出さず、表情で全てを伝えた。これが一番効果があるのだ。「それにしても今回のスローガン、なんでそこまで333文字以内でいいじゃねえか」と、達也が言うので、「きつと実行委員会のやつらの中に3が好きなのがあるんだろ。たった2個の3じゃ満足できなかったんだよ。で、3個並べてみた。まあ、そんなとこだろ」と俺が言うと、達也は「そんなもんかなあ」と言い、俺の答えに不満そうな顔をしていたが、とにかくまずは目の前の宿題を終わらせる事を第一と考えたらしく、うんうんとかむむむとか唸りながら目を閉じ、考えているフリ(のうしろにしか俺には見えない)をはじめた。ちなみにこれもいつものパターンだ。こうして5分ほど経ったところで俺が助けに入る。それまでは一応自力で取り組ませてみることにしている。だが今回は正直俺もめんどくさい宿題だな、と思う。できれば人の分なんて考えたくもない。そこで今回はいつもより長めに自力で考える時間をあげることにした。さすがのこいつも1時間も2時間もただうんうん唸っているわけにもいくまい。そのうち自分でなにかしら形になりそうなものを書き始めるさ。それまで俺はただ見ていればいい。そう思っ、今回は俺も一緒にうんうん唸っていることにした。ま、人間誰しも失敗くらいするさ。この時の俺の判断が間違っていた事を俺はこの5時間後に思い知ることになる。それからもう二度と5分以上の時間を達也に与えることはしなかった。

The Second

中学の卒業式。

みんなが別れを惜しんでいる中、僕はまだその相手にすら会えてなかった。式も終わり、そろそろと同級生たちは校庭へと出ていく。

後輩の面倒見がよかったからか、出るやいなや後輩たちにたかられる。

有無を言わず学ランのボタンを強奪されてゆく。

全開になった学ランを着て、君を探した。

もう会うことなんてない。
だからせめてこれだけは。

人ごみの中で、君の声がかすかに聞こえる。

やっと見つけた。

見つけてまず手渡し、そして一言だけ。

「守った。」

すし、ふしぎな話

この星への入植が始まったのは、今日から丁度四百年のことです。

ええ、私が造られたのも丁度その時でした。この星の歴史の記録、気象や重力場の操作、入植者たちの情報の管理が目的で、私は造られました。

話を戻しましょう。そもそも、この星への入植は、増えすぎた人口への苦肉の策であつたと聞いています。大気存在、公転周期と自転周期の類似がこの星を選んだ理由とされていますが、地球に近く、位相差空間を使った人員の輸送が容易かつ迅速に行える事が決定打だと、地球のマザーから聞いています。毎年二倍に膨れ上がる人口に、地球政府は焦っていたのでしうね。当然、入植者を選ばれたのは下級市民の方々でした。地下層で細々と暮らしている人々を、世界政府は切り捨てたのです。娯捨て山もこれに比べればまだ人道的だと、入植者の方々がよく話されていたのを覚えています。

そうです、あの方々は、その様な仕打ちに負けることなく、たつた百年で、地球のどの都市にも負けないものを造りだしたのです。入植当初はこのセクター一つでしたが、三十年毎に三つ増えていきました。当時地球で最も栄えていた都市、新浜に劣らぬ都市が、この星には十もあつたのです。

この辺境の地がそれ程までに発展したのが、不思議で仕方ないようですね。

この星への入植が始まって間もなくの事です、地球で「自己同一性に関する最小構成単位の定義」が発表されました。空想の産物でしかなかった義体化、脳の電器化への可能性が開けたのです。それから二十年経った頃、電子脳が発表され、更に五年経つと、大衆向けの電子脳が発売されました。かくして、この星は義体化特需に沸きました。なにせケイ素と腕の立つ職人は山のようにいましたから、安価で高品質なマイクロマシンの大量生産に成功したのです。ケイ素の鉱脈周辺に新しいセクターが建設され、地球から送られる大量の海水で、セクター同士は運河で結ばれました。モノとモノが行き交ひ、セクターの経済成長は右肩に下がる事など知りもしません。特需は何十年もの間続き、おかげでこの星は地球に劣らぬまでの発展を遂げたのです。

はい、事が生じたのは二百年前の事です。地球の人口が減り始めました。ネットの仮想現実には、は集まり、現実世界の肉体を放棄し始めたのです。年々人口減少に拍車がかかり、百年経つ頃には、二十世紀の平均人口までに落ち込みました。すると、どうでしょう、地球政府は手のひらを返すように、この星の人々に対して地球への移住を勧め始めたのです。可笑しなことに、この星の人々は進んで移住を始めました。十三のセクターは十年毎に二つ減り、あつという間にこのセクターだけになりました。不思議なものです、皆さんこの星で生まれ育つたというのに。しがたない蓄音機風情には理解できない何かがあるのでしうね。このセクターも次第に人が減り、ご存知の通り、丁度五年前にこの星の廃棄が決定しました。

以上がこの星の歴史の概略です。廃棄の決定以来、私の物理メディアは拡張される事なく、残り三三三文字を残すのみとなりました。勿論、最後のお客様のお好きなように使つて下さい。ただ、地球には行けない、蓄音機に餞の言葉を少し下されば、

それでは、この星最後の、人類の言葉を、どうぞ。

いえ、何でもありません。

いい子。いい子ね。いい子だわ。

まあすごい。もうこんな本も読めるのね。偉いわね。

今度は算数をやりましようね。もうすぐ小学生なんだから。

ほら、ちゃんと勉強しましよう？いい子でしょう？

愛情という名をした牢

獄の、鍵はいつたどこに

あるのだろう。

学校のお勉強は順調？また百点とれるかしら？そう、いい子ね。お母さん大好きよ。

おなかが痛い？どうしてそんな嘘をつくの？いい子でしょう？いい子は嘘をつかないの。

もうそろそろ入試ね。頑張りましようね。

将来立派な人になるための第一歩だもの。

来月から小学校の帰りにここに寄ってね。英語を教えようね。

そろばんは上手に使えるようになった？計算がはやくなれば、また学校のテストで満点とれるわよ。いい調子？そう、よかつた。さすがはお父さんの子ね。

疲れた？もう少し頑張ってみよう？やればできる子なんだから。

青蛇文書考察

『青蛇文書』というのは、昭和二十五年から二十七年に出回った怪文書のひとつで、現在でも稀に小説の題材として扱われている。昭和二十年代、つまり第二次世界大戦直後の日本では、カストリ雑誌という粗悪な紙を使用した出版誌群が多く出回っており、青蛇文書が初出掲載されたのもこのカストリ雑誌においてであった。カストリ雑誌というのは、過度に性的であったり過度に猟奇的であったりという傾向を持つ出版誌群で、青蛇文書もこの傾向に違わず極めて趣味の悪い内容だった。しかし、青蛇文書の不可解な点はその内容の他にある。そもそも青蛇文書というのは題名すら持たない作品で、その呼び名は初出が「青蛇」という名前のカストリ雑誌だったことからきているに過ぎない。更に付け加えれば、青蛇文書の内容そのものを完璧に把握している人間は、おそらく過去にも現在にも存在しない。なぜなら青蛇文書というのは、二百五十二文字以上三百三十三文字以内の文章の断片だけが、不特定多数のカストリ雑誌にゲリラ掲載されていた作品だからだ。しかも、そんな読者を無視しきった作品であるにも関わらず、青蛇文書は昭和二十五年からの三年間、なんと五十超ものカストリ雑誌に掲載されていたという。青蛇文書が小説としてではなく、あくまで怪文書として扱われる理由である。

さてこのように、青蛇文書は非常に不可解な存在であるため、現在まで多数の人間がこれを研究題材として取り上げてきた。筆者の調べた限りでは、昭和と平成の境目辺りが、青蛇文書研究の最盛期だったようだ。これら全ての研究を紹介することはさすがにできないが、青蛇文書研究の流れを大まかに掴むには、僅か二つの研究を知るだけでも十分だと思われる。榊原短編賞を設立した小説家・榊原一の『怪文書紹介』と、エッセイスト・柳田十八の『カストリ趣味』である。

榊原一の『怪文書紹介』は、そもそも青蛇文書を世間に知らしめた著作である。榊原は趣味で集めていた古雑誌に、同じ作品の断片らしい二十六の奇怪な文章を見つけ、これを青蛇文書と名付けた。『怪文書紹介』というのは新聞に連載されていたコラムをまとめた本で、青蛇文書の他にも十七の怪文書が取り上げられているのだが、榊原自身この青蛇文書には強い興味を持っていたらしく、他の三倍近くの紙面を青蛇文書について割いている。そして榊原は、結局青蛇文書は印刷工場で働く人間の仕業だったのではないかと、著作の

末尾で結論付けている。カストリ雑誌というのは、性格上規模の小さな会社が出すのが普通であり、そのため横の連携はないに等しいから、多数のカストリ雑誌に作品を載せられるほど顔の広い人物というのは考えにくい。しかし、印刷工場で働く人間であれば話は別である。おそらく文人を夢見る青年あたりが、無断で印刷紙面に自分の作品を紛れ込ませていたのだろう。というのが、その榊原の推測である。

しかしこれに柳田十八が反論する。柳田の反論は青蛇文書の文字数に基づいている。青蛇文書が必ず二百五十二文字以上三百三十三文字以内でぶつ切りにされていることは前述したが、紙面内の広告やページフツダなどを含めると、ちょうど一ページ三百三十三字で構成されていることに、柳田は気付いたのだ。このように文字量を調節するためには、実際に印刷するよりもずっと前、グラ校正のときに文書を作成する必要がある。そこで柳田は、青蛇文書は編集者たちの仕業だったのではないかと考えた。そして、三百三十三字という文字制限は、当時話題になった『六六六字の手記』（メモ帳ページ三百三十三文字、つまり見開きがちょうど悪魔の数である六百六十六文字になるよう日記を書き続けると悪魔が召喚できるといふ設定の怪奇小説）にちなんだものだろうと、柳田は結論している。ただし《多数のカストリ誌に影響力を持つ人物は、やはり謎》であるとし、しかし《それが青蛇文書の最たる魅力なのだ》と締めくくっている。

だが筆者には、柳田の言うような『謎の人物』など、榊原の言う通りやはり存在しない気がしてならない。むしろ青蛇文書は、都市伝説と同様なかば自然発生的に紡ぎだされた存在なのではないかと、筆者には思われるのだ。まず初めに、単なる落丁として物語の断片が「青蛇」の紙面に混入してしまう。しかし、その文字数がちょうど『六六六字の手記』を連想させる三百三十三字であったために、他雑誌の編集者が面白がりこれを真似する。そして、それが次から次に広まって、ついには五十超の雑誌が真似しだす。そんな仮説は成り立たないだろうか。

もちろん、論理的な裏付けのない極めて薄弱な仮説ではある。けれど、架空の事件や架空の人物を赤の他人が協力して創りだしてしまうという例は、現在のインターネット環境下ではありふれたものだ。そして、そういう虚構を創りたがる性というのは、たとえインターネットなどなくとも、十分顕現しうるものなのではないだろうか。

そうたとえば、いまあなたの目の前にある、この文章のように。

町

田舎の冬は雪模様
鈍色の空を鳥が往く
いつもと変わらぬ風景を
背中に君は町へ行く

夢を夢で終わらせない
そう言つた君は絶対に
小さな硬貨を握り締め
釦を押して夢を買う
そんな人とは違つてた

誰かに聞いた話だが
町には『心買い』棲むという
皆幸せを得るために
心を何かと引き換える

おそらく君は僕との想い出を
そこで何かと引き換える
町に住むとはそういうこと

とても哀しいことだけど
それでもいいと僕は思う

二束三文の想い出も
君が幸せになるならば

そこに崖があるのなら
僕を橋にすればいい
そこに壁があるのなら
僕を台にすればいい

君の夢は僕の夢

君が幸せになつたとき
どこかの町の道端で
転がる僕との想い出を
もしも、もしも見つけたら

そつと手に取り微笑んで
こんなこともあつたな、と
笑つてくれたら本望だ

文字の数を考える

われわれが現在使用しているこの文字は、単位当たりどれだけの情報量を伝えることができるのだろうか？印字可能な文字は漢字を含めておよそ数万種はあるから、一文字あたり数十キロバイト以上……ということではなく、実際に実用可能な形式で、例えば新聞記事は一つ書くのに何文字必要かということである。

あなたが身近な者から例えば

「333文字で何か書いてくれ。」

と言われたとき、それを多いと感じるだろうか、それとも少ないと感じるだろうか？わたしは短いと感じる。

わたしは小さいころテレビから流れる英語とその画面に映し出される日本語字幕を比べてみて「英語の方がより短い時間で物事を伝えているな」と感じたものである。日本語は一字にひとつ音節を持つから子音を多用する英語などの外国語に比べて時間はかかってしまうのかもしれない。

だが文字数はどうだろうか？そこで身の回りの文字数を調べてみた。

例にも出したように新聞をみてみよう。今手元にある日経新聞（平成20年11月5日朝刊）の見出し記事は11文字が110行で、空白や改行を含んで約1210文字であった。

他にも小さい記事で大体30行300字程度、中程度の記事で60行650字、平均450字ほどであった。

これはあくまで概算で、統計に適用するような確かな数値ではないが、一つの記事あたり数百字が必要であるうかということがわかる。

逆にテレビのニュースを聞きとってみると意外と少なく、11月5日のNHKニュース7の最初の記事で300字ほどであった。（さすがにこの値は詰める猶予がありそうだが）

ニュース以外にもここに書いてあるようにB5用紙にはこの文字の大きさでおおよそ千字程度は記入できる。（文字を小さくするなどすれば更に入る。）この文章は1044字である。手近にあった数学の教科書は1ページ全部字にすると34字30行で千字くらいはありそうだ。そこに定理でいうと二つほど説明されている。

これらのことを考えると作文用紙が400字詰めなのはなるほど理にかなっているのかもしれない。小さなことならば大抵A4用紙一枚で伝達できるし、身の回りの書物、例えば教科書などを見てみるとよく考えれば大きさはどれも適切程度であるように思えなくもない。

だがそもそもそうでないと、文字は文化として成立しないのだろう。

これはどの国のどの言葉も持っているだろう神秘的なのかもしれない。

今回は文字数から文字をとり扱ってみたが、字体などさまざまな角度で検証することで、文字の神秘にふれることができるのだろう。

君が好きでした。とても、とても。

けれどもう、忘れてしまおう。

いつか他の誰かのものになってしまふのだから。

綺麗だ、と心からそう思うのに。

もうどうすることもできない。

だから毎日、ただ君を想う。

ひっそりと、君を想う。

君はこの手紙を受けとることはないだろう。

この気持ちに気付くこともないだろう。

君が好きだ。

君が好きなんだ。

忘れられない。

うすいブルーの便せんに、丁寧に、淡々と書きつづられたその手紙は、つ
いさつき旅立っていった彼女の枕の下に大切にしまわれていた。

木枯らしのふく病院の屋上で、僕はそれを何度も読み返した。

空を見上げた。涙がこめかみのほうに流れたのがわかった。

冬の高い空は、どこまでも青かった。

僕は忘れない。君の気持ちも。笑った顔も。

絶対に、忘れない。

階段上り

僕の地元には観水寺みみずという寺がある。全国的には全くの無名なのだが、現地の人々からは親しまれていた。自分も、幼少の頃は友人たちとの遊び場として訪れたものだった——この観水寺は、名前の由来が非常に興味深い。寺の特徴でもある長い階段は、全部でちょうど三百三十三段を数える。段数が「三がみつある」ということで「み・みつ」↓「みみず」と発音されるようになっていったのだと言われている——この長い階段で良くした遊びがある。名称は定かではないのだが、仲間同士でジャンケンをして、グーで勝てば「グリコ」チョキで勝てば「チョコレイト」、パーで勝てば「バイナツプル」とそれぞれ言いながら、それに合わせて階段を上っていくという遊びだ。誰かが頂上に着けばおしまい、その後は境内で他の遊びに取り掛かる。つまりこの「階段上り」の遊びは、目的地に着くまでの余興に過ぎないのだが、子供心に負けん気が強くなったのを覚えている。

一緒に遊んだ友人の中に、僕より二つ年上の女の子がいた。僕は彼女を本当の姉のように慕っていて、観水寺にも良く二人で遊びにいった。そのときには、やはり「階段上り」の遊びをするのだが、何回やっても僕は彼女に勝てなかった。思い出してみれば、僕は最初にパーを出す癖があったようで、彼女はそれに気付いていたのだろう。負けず嫌いの自分は、何度も挑戦したのを覚えている。それでも、彼女より先に三百三十三文字言い終えることは出来なかった。

彼女と遊ばなくなったのは、いつごろだっただろうか。頻繁に会わなくなつてからも、同じ町内に住んでいるから何度か顔を合わせた事はあった。会うたびに僕のほうが一回りも二回りも大きくなつていって、それでも彼女は僕にとつて姉であつた。僕が、彼女に最後に会つたのは高校三年生の終わりの頃、県外の大学への進学が決まつたときだった。

大学に入学してからは、地元へ戻る事も余りなくなつてしまった。顔を出すにしても数日で、結局彼女と会う事はなかった。大学卒業後も都会の企業へ就職し、仕事に追われる生活であつた。

彼女が亡くなつたのを聞いたのは、今年。久しぶりに実家に帰つたときの事だった。亡なつたのは、もう二年も前のことだという。僕は事実を理解できず、ただただ驚愕するだけであつた。彼女は数年前から病を患い、二年前に命尽きたのだという話であつた。

翌日、僕は彼女の家を訪ねた。久しぶりの姿に、彼女の両親は歓迎してくれたのだが、出迎えに彼女が居ないのが、不意を打たれた様に悲しかった。家を出た後、僕は彼女の墓に御参りに行くことにした。苦しい時にも、死に目にも会えなかつた不甲斐無い弟の、せめてもの償いをしたと思った。彼女が眠っているのは、思い出の場所。結局、僕が彼女より先に行くことが出来なかつた場所だ。

一段一段階段を上りながら、僕は小さな声で呟いていた。

「グ・リ・コ」

「チ・ヨ・コ・レ・イ・ト」

「パ・イ・ナ・ツ・プ・ル」

彼女は、これからはずっと階段の上にいるから、こうやって上ることもないのだろう。そんな事を思いながら、僕は一つ一つの段を丁寧に乗上つていった。

そして木々に覆われた寺の、湿り気を帯びた独特な空気の中。
僕は、三百三十三文字目の言葉を紡いだ。

タイトル十名前十一行分の余白十：

タイトルと名前を書き、「ぼくのゆめは」とだけ書いて息子は鉛筆を置いてしまった。明日提出の宿題として出された、大事な作文だというのに。

「どうした？ 無いわけじゃないだろう。」

「こんなのにかけないよ。」

駄々をこねる息子に、てつきり内容が思いつかないものかと思って私は学校からもらってきた原稿用紙の変わりに1枚の白い紙を差し出した。

「じゃあまずは好きに書きなさい。」

とたんに息子は鉛筆を握りなおし、その中に不恰好ながらも小さな字をたくさん敷き詰めていった。そして、息子がどうして「こんな『の』にかけない」なんて言ったのか、やっと知ることが出来た。

「できた！」

そこには、息子がなりたいたくさんの職業について、原稿用紙に納まらないほどの息子の思いがたくさん詰まった「黒い」紙があった。

次の日、私は妻から原稿用紙を使わなかったことについては怒られたものの、息子の作品はとても喜んでもらえたことを耳にした。

その使わなかった原稿用紙は、今頃333文字分のスペースを残したまま、息子の机の引き出しの隅っこに追いやられている頃だろう。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	ある日の放課後。	1 pt	8 位	1 sp
		明日までの宿題っ！ でスタートの今週です。 いるよね、つい手出しして助けてやりたくなる憎めないヤツ。友だち光景、さらり親しみやすく伝わってきます。5時間はやりすぎだったか。 で、改行は欲しいかな。ついヨコヨミを疑いたくなるコラム病者集団に対しては特に。 特別賞：どこ横読みで賞 by SH902i班（よみにくい）		
02	The Second	5 pt	6 位	0 sp
		制服ボタンに託したストーリー。ラストの「守った。」のひとことが、ほんとにずっと読者の気持ちに着地します。これで新境地開拓なるか？ヨコヨミスペシャリストさん。 イチオシフレーズ大賞もゲットして、とりあえず、来週の「甘」にて続編のお約束。 イチオシフレーズ：「強奪されてゆく」「後輩たちにたかられる」「守った。」× 2		
03	すこし、ふしぎな話	7 pt	5 位	2 sp
		栄えたものが、また滅びてゆく。その骨太のストーリーと、置いてゆかれる蓄音機（また、なんと古風な！）の対比があざやかです。 ただ、「さいごの人」に対して歴史を語るという設定が、やや不自然か。むしろ探検家に対してとか？ 特別賞：y=A・2X賞 by つっこみどころまんさい班（生命の神秘） / 餞賞by Full count 班（読み方に自信がなかった） イチオシフレーズ：「新浜」		

		「餞」「いえ、何でもありません。」
04	(牢獄)	2 pt7 位2 sp レイアウト派参上！ いい子いい子の連打で追いつめられてゆく感が、伝わってきますけど、圧迫感や閉塞感、もっとレイアウトで出せるのでは？ それと、これって「愛情」？ にも答えなかった。 でもって、手計算の罨、まざまざ。おつかれさま。 特別賞：恐いで賞 by Avenge333以上班 / 大変な賞（小）学生 by 333もじ（鏡文字）班（中学受験時代を思い出した）
05	青蛇文書考察	11 pt2 位1 sp これは凄かった。思わずほんとか！ と検索かけてしまったではないですか！ おめでとう銀メダル!! 特別賞：正当派なのか賞（正当派なのか架空なのか分からない） by グリコのおまけ班
06	町	8 pt4 位0 sp 後半はうまくリズムに乗っているのですが、前半の乱れが惜しい。 ストーリーは見えるのですが、イメージをきゅっと束ねる小道具がほしいかな。 そしてそして、手計算の罨、ここにも。
07	文字の数を考える	0 pt10 位2 sp 正統派参上！ なのですが、お題をずらして文字数トークになってたり、けっきょくA4と400字、どっちが適切なの？ など、まだまだまだまだツメ甘いぞ～。 そこをクリアすると、輝かしい正統派キングの称号が待ってます。青蛇なんぞに負けずに、がんばってくださいませ。 特別賞：コラム賞 by 印度班（正統派貴重） / 寝ま賞 by

		Go番長い班（朝刊）
08	絶対に、忘れない	1 pt8 位1 sp 便箋のブルー、そしてスカイブルー。せつなさ全開。 ただ、「綺麗」のひとことが、この手紙を女の子のものと読む理解をジャマしてしまうのですね。各班の選考シートにも、ちらほら迷いが見られました。 特別賞：ニアピン賞 by Drei班（327 一番333に近い） イチオシフレーズ：「絶対に、忘れない」（太字明朝）
09	階段上り	14 pt1 位0 sp ち・よ・こ・れ・い・と！ せっかくのロマンティックな設定もTAさんたちにかかる、期待値5歩だから、あいこも引くと、この二人が333段上るためには、じゃんけん200回？ ムリじゃね？ と確率計算のネタに。 これだから理系の男は……（以下略） 東京タワー設定を変更したら、こうなりましたとさ、だそうで。何はともあれ、首位、おめでとう!!
10	タイトル＋名前＋一行分の余白＋…	11 pt2 位1 sp 梓になんか収まるもんか、という息子の心意気にほろりです。333を「書かれた文字」でなく、「書かれなかった文字」と置いた設定が、まさに未来形のストーリー展開にぴたり。おめでとう銀メダル!! そして、死ななかったね、ついに。そこもおめでとう!! 特別賞：公共広告機構賞 by INAI班（ACっぽいから） イチオシフレーズ：「こんな『の』に書けない」/「黒い」紙があった。 ——人生、宿題に始まって宿題に終わるのですよ、うん。